

## 分配関数，密度行列，古典対応

量子力学ではカノニカル分布の分配関数  $Z$  は，ハミルトニアン  $H$  の固有値，固有状態をそれぞれ  $\{E_i, |\psi_i\rangle\}$  として

$$Z = \sum_{E_i} G_i e^{-\beta E_i} = \sum_i \langle \psi_i | e^{-\beta H} | \psi_i \rangle = \text{Tr} e^{-\beta H} \quad (1)$$

で与えられる。係数  $G_i$  はエネルギー固有値  $E_i$  が縮退している場合の縮重度（同じ固有値  $E_i$  をもつ独立な状態の数）であるが， $\{|\psi_i\rangle\}$  は，縮退している場合を含めて完全系を構成しているとする。（エネルギー固有値  $\{E_i\}$  の中に「同じ値のものがある」と考えておけばよい。）記号  $\text{Tr}$  は行列の対角和である。演算子

$$\rho = Z^{-1} e^{-\beta H} \quad (2)$$

を，カノニカル分布の密度行列という。この場合，状態は1つの波動関数で表現される純粋状態ではなく，混合状態

$$\rho = Z^{-1} \sum_i e^{-\beta E_i} |\psi_i\rangle \langle \psi_i| \quad (3)$$

である。（「雑書庫」[209]）これを用いると，任意の物理量（エルミート行列） $Q$  の平均値は， $Q$  の純粋状態  $|\psi_i\rangle$  における量子力学的期待値を用いて，

$$\langle Q \rangle = \frac{1}{Z} \sum_i \langle \psi_i | Q | \psi_i \rangle e^{-\beta E_i} = \frac{1}{Z} \sum_i \langle \psi_i | Q e^{-\beta H} | \psi_i \rangle = \text{Tr} Q \rho \quad (4)$$

で与えられる。エネルギー表示では密度行列は対角行列であるが，状態ベクトルをユニタリ変換して別の完全直交系で表し，非対角行列になっていてもかまわない。行列のトレースはユニタリ変換で不変，すなわち変換行列を  $U$  として，トレースの性質「 $\text{Tr} AB = \text{Tr} BA$ 」により

$$\text{Tr} U^\dagger e^{-\beta H} U = \text{Tr} e^{-\beta H} U U^\dagger = \text{Tr} e^{-\beta H}, \quad \text{Tr} U^\dagger Q U U^\dagger \rho U = \text{Tr} Q \rho U U^\dagger = \text{Tr} Q \rho \quad (5)$$

であるから，分配関数や物理量の平均値は変わらない。

状態をエネルギーの代わりに運動量あるいは座標で表す場合，トレースは  $p$  表示でとるか， $q$  表示でとるかの二者択一になる。一方，古典統計では，例えば1自由度の場合，位相平面  $(p, q)$  での2重積分で求めた。この対応は，必ずしも自明ではない。

まず，ハミルトニアンを

$$H[q] = -\frac{\hbar^2}{2m} \frac{\partial^2}{\partial q^2} + V(q) \quad (6)$$

として， $q$  表示での分配関数は変数  $q$  についての積分

$$Z(\beta) = \text{Tr} e^{-\beta H[q]} = \int \langle q | e^{-\beta H[q]} | q \rangle dq \quad (7)$$

で表される。密度行列  $e^{-\beta H[q]}$  の行列要素は，固有関数系による対角行列表示

$$H[q] \psi_n(q) = E_n \psi_n(q), \quad e^{-\beta H[q]} = \sum_n e^{-\beta E_n} |\psi_n\rangle \langle \psi_n| \quad (8)$$

を用いれば<sup>1</sup>

$$\begin{aligned} \langle q' | e^{-\beta H[q]} | q \rangle &= \sum_n e^{-\beta E_n} \langle q' | \psi_n \rangle \langle \psi_n | q \rangle = \sum_n e^{-\beta E_n} \psi_n^*(q) \psi_n(q') \\ &= e^{-\beta H[q]} \sum_n \psi_n^*(q) \psi_n(q') = e^{-\beta H[q]} \delta(q - q') \end{aligned} \quad (9)$$

<sup>1</sup> ブラ，ケットベクトル  $\langle \psi_n |, |\psi_n\rangle$  は， $q$  表示で  $\langle \psi_n | = \int \langle q | \psi_n^*(q) dq$ ， $|\psi_n\rangle = \int \psi_n(q) |q\rangle dq$  と書ける。また， $\langle q' | q \rangle = \delta(q' - q)$  だから  $\int \langle q' | q \rangle dq = \int \delta(q' - q) dq = 1$

となる。最後の  $\delta$  関数は、固有関数系  $\{\psi_n(q)\}$  の完全性の条件

$$\sum_n \psi_n^*(q)\psi_n(q') = \delta(q - q') \quad (10)$$

によるものであるが、ここで対角要素 ( $q' = q$ ) を考えると訳が分からなくなる。この  $\delta$  関数をフーリエ変換表示

$$\delta(q - q') = \frac{1}{2\pi} \int e^{ik(q-q')} dk \quad (11)$$

で置き換えた上で、指数関数  $e^{-\beta H}$  を展開し、交換関係

$$\frac{1}{i} \frac{\partial}{\partial q} e^{ikq} = e^{ikq} \left( k + \frac{1}{i} \frac{\partial}{\partial q} \right) \quad (12)$$

を繰り返し用いれば、

(注 . ここでは  $p = \hbar k$  も演算子ではなく  $c$  数)

$$\begin{aligned} \langle q' | e^{-\beta H} | q \rangle &= \frac{1}{2\pi} \int e^{ik(q-q')} \exp \left[ -\frac{\beta \hbar^2}{2m} \left( k + \frac{1}{i} \frac{\partial}{\partial q} \right)^2 - \beta V(q) \right] dk \\ &= \int e^{ip(q-q')/\hbar} \exp \left[ -\frac{\beta}{2m} \left( p + \frac{\hbar}{i} \frac{\partial}{\partial q} \right)^2 - \beta V(q) \right] \frac{dp}{2\pi \hbar} \end{aligned} \quad (13)$$

が得られる。ここで初めて対角要素 ( $q' = q$ ) を取り出し、古典近似 ( $\hbar \rightarrow 0$ ) をとれば

$$\langle q | e^{-\beta H} | q \rangle = \int \exp \left[ -\beta \left( \frac{p^2}{2m} + V(q) \right) \right] \frac{dp}{h} \quad (h = 2\pi \hbar) \quad (14)$$

となり、(7) とあわせれば分配関数は

$$Z(\beta) = \iint \exp \left[ -\beta \left( \frac{p^2}{2m} + V(q) \right) \right] \frac{dpdq}{h} \quad (15)$$

と、 $p, q$  についての 2 重積分で表される。

1 粒子の場合は  $q$  を  $r = (x, y, z)$  に、 $p$  を  $p$  にすればよく、位相空間の体積単位は  $h^3$  になる。多体の場合は、 $\delta$  関数の完全性表示に対して、直交関数系として粒子の番号の入れ替えに関して対称化 (Bose 粒子)、または反対称化 (Fermi 粒子) した多体波動関数を用いれば、分配関数の分母、 $h^{3N} N!$  が導かれる。(→ 久保「大学演習熱学・統計力学」p.301)

1粒子系で  $h^3$  が得られておれば、N 粒子系での  $N!$  は古典的考察で得られる。 [232]